

前置詞について

—英語学習者にとってのハードル—

青木 景子

1. はじめに

仕事に追われて、長らく原書を読むという機会から遠ざかっていた。不勉強を反省し、とりあえず Edgar Allan Poe の作品を手にとってみた。

長いブランクの後なので、始めはとっつきが悪かったが、じきに英語の小気味よいリズムの世界に引き込まれた。目で追いながらも英語独特の音感を感じることができる。この音感はどこから生じるのか気になった。やがてその音感、独特のリズムは前置詞の多用からきているのでは、と思い当たった。

例えば *The Fall of the House of Usher* の冒頭の部分はこうなっている。

During the whole of a dull, dark and soundless day in the autumn of the year, when the clouds hung oppressively low in the heavens, I had been passing alone, on horseback, through a singularly dreary tract of country; and at length found myself, as the shades of evening drew on, within view of the melancholy House of Usher.

この1文の中に13個の前置詞が使われている。前置詞の後の名詞はアクセントをもって読まれるが、前置詞それ自体は強く発音されることはない。前置詞で弱く、次の名詞で強く発音される度に、英語の独特のリズムが生まれるのだろう。しばらく先の文を見てみよう。

I looked upon the scene before me—upon the mere house, and the simple landscape features of the domain—upon the bleak walls—upon the vacant eye-like windows—upon a few rank sedges—and upon a few white trunk of decayed trees—with an utter depression of soul which I can compare to no earthly sensation more properly than to the

afterdream of the reveller upon opium—the bitter lapse into everyday life—the hideous dropping off of the veil.

この中では17個の前置詞が見られる。これは主人公の網膜に写る諸物が写實的に表現された際、upon が多く登場したことにもよる。このように写實的描写になるほど、結果として前置詞が多用される。

文学作品中に前置詞が多く現れているというのは、英語学習上、また指導上のヒントを提示しているように思う。

聞いて読むだけではなく、話し書くための発信型の英語を目指すならば、前置詞の習熟によってより深く自由な表現が可能になるだろう。英語で文学作品を表さなくとも、英語による表現は昨今ますます必要となっている。英語での表現力と前置詞の習熟の問題は切り離せない。

2. 前置詞のいろいろ

英語の前置詞はどのくらいあるのだろうか。 *A University Grammar of English* (Randolph Quirk, Sidney Greenbaum 共著, Longman社) の *Prepositions* の項からざっと拾ってみた。

at, from, by, on, of, about, into, after, with, for, along, as, past, in, since, before, to, off, upon, over, above, beside, near, between, amid, among, amongst, below, behind, underneath, across, through, down, (a)round, toward, beyond, up, throughout, until, till, like, against, without, except, but 以上で45個ある。(熟語は除く)

比較の意味でフランス語では、主に après, à, avant, avec, chez, contre, dans, de, depuis, derrière, dès, devant, en, entre, envers, hors, jusque, malgré, outré, par, parmi,

pendant, pour, sans, sauf, sous, sur, vers…(以上で28個)など英語に比べると数が少ない。

ドイツ語では前置詞の格支配があるのでその学習には相当の時間と労力を要するようである。一方英語は、各社の高校英文法でも品詞の項の1つとして前置詞を取り上げている程度であるし、授業でもその他の文法項目ほどは重要視されない向きもある。英語の前置詞がドイツ語ほど複雑でないのは幸いかもかもしれないが、フランス語と比べると、その数の多さと使い分けは学習者を悩ませる。

3. 学習者と前置詞

振り返って、学生たちの前置詞との関わりを少々考えてみたい。中学入学時には希望で胸を膨らませ、英語を学び始める(現在中学生以上の人たちの一般的な場合)。

手元の『Total English I』(秀文出版)中で前置詞がどのようなphrasesで出てくるかを調べてみた。

pictures of my family
 teach at a junior high school
 be on the basketball team
 be in the English club
 go to elementary school
 welcome to our home
 help in the kitchen
 Who is the tall man in the picture?
 Who is that boy by your father?

(～lesson 6)

第6課までにof, at, on, in, to, byの6つが登場しているが、すでにon the ... team, やin the ... clubはとても紛らわしい。このonとinの使い分けはどう区別するのか、あるいはどちらでもいいのか、学習者は疑問に思う。外国語として学ぶ者にとって前置詞はとても難しく、学習の初期の時点でつまずく要因の1つになっているのではないだろうか。そのような疑問点がつまずきのきっかけとなるのではなく、「より知りたい」「わかりたい」という更なる学習の動機づけとなるような指導を行いたい。最近では中学で文法用語を教えない傾向もあるので、前置詞そのものを全く認識していない生徒も時々見られる。

4. onとinについて

現在の勤務校の2人のALTの方にon the team, とin the clubのことを尋ねてみた。“It’s consistent.”(いつもそういう言い方をする。)という話だった。そこで、“A person may be in the club, but he or she may not be on the team. Is that possible?”(クラブには入っているが、チームには入っていないということもあり得ますか?)と尋ねると、“That’s possible.”(あり得る。)ということだった。更に「外国語の学習者としては説明が欲しい。あえて解釈すると“on” means “on the front”, and the person who is on the team is ready to act. という意味で“on”なのではないか?」と私見を述べると、“I think your interpretation is right.”という返答をいただいた。

『ウッド英語前置詞活用辞典』(秀文インターナショナル, R. C. ゴリス, 宮内秀雄共訳編)によると、onの8番目の意味として、「～の一員で、～に関与して」とある。例にはon the committee ..., on the staff等が挙げられている。

先述の*A University Grammar of English*では、場所を表す前置詞としてのon, inを「次元」という用語を用いて解説している。

すなわちonは‘Put your signature on this line’のように1次元, または‘There is a new roof on the cottage’のように2次元の意味を表す。一方inは‘The cow is in the field’のように2次元, または‘There are two beds in the cottage’のように3次元の意味を表すと説明されている。

前置詞1つとっても、このように奥深い。「教える」ことは「学ぶ」ことだと再認識させられる。生徒とともに英語のハードルを越えながら、自身の表現力upも図りたいものである。

(東京都立永山高等学校教諭)